

# お茶の間学Ⅱ

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-np.jp

訪れています。彼らの作品に共通しているのは、家族のどんなや絆を大切にしている点。近隣のコミュニティ形成や地域性を重視した家づくりを指していること

2005年に始めた「『新・木造の家』設計コンペ」は、これまで8回にわたって実施。応募した約170組の学生のうち、40組ほどが作品のプレゼンテーションのために九州の地を訪れています。

## もり 森林をつくらう 脊振の地から

佐藤和歌子

## ユニークな作品続々

がうかがえます。

2〜4回目は募集する際、佐賀を舞台に情報発信をするイベントであることをうたっていた。なので、上から見た形がかまごのようにコの字形をしている佐賀伝統の「くゞ造り」や、全国的に有名な吉野ヶ里公園の高床式倉庫、有田焼の登り窯をイメージした作品など、高温多湿で平野部が多い佐賀の気候風土を意識した作品が多く見受けられました。

5回目以降は、プレゼンテー

ションの場を福岡市に移しました。学生自身の思い出や関心のある場所をテーマに設定したところ、作品はさらにユニークさを増しました。

小学生のころから見慣れている百葉箱をモチーフにしたり、父母が暮らす奈良の盆地を舞台

にしたり。はたまた昨年（東日本大震災で被害を受けた東北地方の復興住宅や、博多に残る町屋をベースにした作品などがその例です。

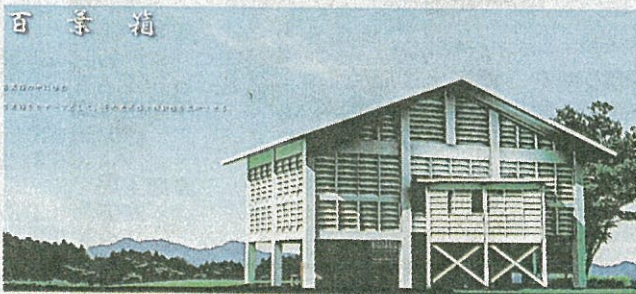
設計コンペに参加した理由を尋ねると、「大学で設計コンペのポスターを見た時、一番知識が少ないのが木造のようないろんな気がした」「地方出身者で木造住宅に囲まれて育ったため、将来は木造の設計に携わりたいが、大学ではなかなか勉強できる機会がないから」「父親が木製品を作る仕事をしており、将来、父親の作る木製品を使った木造住宅の設計をしたくて」

理由や動機はさまざまですが「大学で学ぶ機会が少ない」「イコール「勉強する興味、関心がない」ではなく、木造の勉強をしたい、知りたいと考えている学生たちが少なからずいること。コンペを8年続ける中で、それは確信へと変わっていきました。

(NPO法人「森林をつくらう」理事長、佐賀県神埼市)



有田焼の登り窯をイメージした作品



百葉箱をモチーフにした住宅